

ライシャワー米駐日大使刺傷事件

十九歳 テロルの 季節 岡村 青

現代書館

十九歳 テロルの 季節

岡村 青

ライシヤワー米駐日大使刺傷事件

現代書館



岡村 青（おかむら あお）

1949年9月、茨城県に生まれる。

現在、ノンフィクション・ライター

著書『脳性マヒ者と生きる』（三一書房）

現住所 茨城県新治郡八郷町小幡3146-3

十九歳・テロルの季節

——ライシャワー米駐日大使刺傷事件

1989年8月20日 第1版第1刷発行

著 者	岡 村 青
発 行 者	菊 地 泰 博
写 植	東 京 写 真 植 字
印 刷	平 河 工 業 社
	東 光 印 刷
製 本	黒 田 製 本 所

発行所 株式会社 現代書館

東京都千代田区三崎町2-2-12
電話03(261)0778振替東京2-83725
FAX03(262)5906

定価はカバーに表示してあります。0030-19347-1935

©Ao Okamura 1989

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

十九歳・テロルの季節
——ライシャワー米駐日大使刺傷事件

目次

プロローグ 5

第一章 「ライシヤワー米駐日大使刺傷さる」

14

1 「あれはだれだ！」 14

2 夫人の苦悩 25

3 またも十九歳の少年 37

第二章 決行以前

51

1 “米大使館外壁に立てば、上弦の月” 51

2 時代の局面 66

3 ある予言 82

第三章 民主主義の体現者として

97

1 “学者大使”誕生 97

2 学研の徒として 115

3 戦後日本への直言 134

第四章 テロルの季節

150

1 高校一年・二学期 150

2 転機 166

3 右傾思想への接近 170

第五章 聖戦、いまだ完遂せず

177

1 対話を求めて 177

2 聖戦、いまだ完遂せず 184

3 それから 196

あとがき 204

主要参考文献 206

装幀 貝原 浩

プロローグ

ライシャワー駐日大使刺傷事件が発生したときある新聞は、「『下関事件』以来の国辱である」と書きたてた。

被害に遭遇した相手が大使だったということから、日清戦争の敗戦国の代表として講和条約締結のために来日していた清国の講和全権大使李鴻章が、明治二十八年（一八九五年）三月二十四日、下関の外浜町路上でピストルによって襲撃されたテロ事件を引合いに出したのである。

そして同紙はそのショッキングさを、犯人の少年が精神分裂症気味であったことからか、「氣違いに刃物の怖さをしみじみと感じた」と表現した。

この刺傷事件が起きる四年前、つまり昭和三十五年（一九六〇年）十月に「浅沼社会党委員長刺殺事件」が、そしてさらに三カ月後の翌三十六年（一九六一年）一月にはいわゆる「嶋中事件」が相次ぎ、この種の白色テロル事件には、犯人がまたしても思想未熟な少年であったこととあわせていささか辟易していた。司法当局の怠慢ぶりを非難する声もずいぶん上がった。だからその後池田首相や野坂共産党議長が遊説先で同様の右翼襲撃事件に遭遇したと報じられても、あわてたとすれば側近や関係者ぐらいで、おおかたの国民は事件があつたということすら知らぬほど、関心をしめさなかった。

ところが今度ばかりはそれが違った。襲われた相手が駐日大使という外国要人の、おまけに「知日家」「親日家」、あるいは日本の古代史や文化・芸術の分野にもとりわけ造詣の深い「学者大使」としてつとに知られ、飾り気や気取りのないそのヒューマンでリベラルなところが受け、「おそらく日本人が期待しうるもつともよき駐日大使である」（昭和三十九年三月二十五日付朝日新聞）がゆえに好感をもたれ、日本国民の各層に多くのファンがいるライシャワー大使だったことから、国民の驚きようはそれまでのテロ事件の比ではなかった。

「国民のひとりとしてなんともいえない気持だ。まったく恥ずかしい」（読売新聞）

「じつに情けない。気が変ではすまされない」（週刊朝日）

「もしそんな精神異常者が私のまわりにいたとしたら……考えただけでもゾツとしちゃうわ」（週刊平凡）

国民の受けたショックは、こうした異口同音に発せられた言葉に端的にしめされる。

そして、たちまちライシャワー大使が入院する虎の門病院の受付け窓口には、天皇・皇后、皇太子夫妻をはじめ各界著名人士にまじって、少年と同級生であったかつての沼津市立第四中学校三年A組の生徒たちが送った花束もふくまれていただろう見舞いの品々や名刺が山と積まれ、励ましやお詫びを記した丁寧な手紙が殺到した。

ところで、テロル、クーデター、ないし暗殺と聞いて、あるものは「二・二六事件」を即座に思いおこすかも知れず、あるいは「張作霖爆殺事件」や政・財界要人の大量暗殺と国家改造をた

くらんだ「五・一五事件」を記憶に呼びおこすものもあるかも知れない。私なら幕末期に起きた「桜田門外の変」と昭和初期に発生した「血盟団事件」をまず挙げるだろう。どちらもその実行動と内にもつ質的な面において、暗殺史上まれなところが挙げる理由だ。

前者は二百六十年の長期にわたって連綿と続いた徳川幕藩体制の屋台骨を根底からゆさぶった。同時に、米国公使ハリスの強行かつ執拗な開港、ないしは屈辱的ともとれる通商条約締結要求を契機として、民族意識（ナショナリズム）に目覚めた輕輩下級武士が政局、あるいは歴史の前面に突如おどり出て、ついにはいわゆる「明治維新」体制へと歴史を牽引していくことになる。

後者はというと、大正末期から昭和初頭にかけて席捲した金融恐慌、経済パニックによって惹起された農村恐慌の中で起こった。ロンドン海軍軍縮条約にみるわが国の軟弱外交、政財界の腐敗墮落等に不満を抱き、これを一気に打破し、さらに国家革新を成し遂げるには「一人一殺」によるテロリズムのほか途はなしとし、いわゆる「昭和維新」のさきがけとなり、その後起こる五・一五事件、二・二六事件の導火線の役割をはたす。

また、両者ともテロルの顔ぶれはとみると茨城県出身者でかためられている。それも挙げるひとつの理由だ。かくいう私も茨城県出身である。だからかも知れない、テロルというものにどうしても無関心でいられないのは。

いかに歴史上に「汚点」をしるすほどの「大罪」を犯したかは知らない。しかし法に叛き、権力に歯向かえばどうなるか、待っているものがあるとすればそれは極刑であるということぐらい、本人ならずとも知っている。にもかかわらずそれを敢えて成さざるを得ない、この人間そのもの

が持つ根深い、業ごうのような仮借ないこの矛盾こそ、しかしじつはもつともテロリストをしてテロリストたらしめる人間復活の、實在の証明なのだ。

「人命は地球よりも重い」。名言だと思う、おそらくこれに異論を持つものはいないと思う。人命はいかなるものにも替えがたい。

だからこそひとはいうのだろう。己の主義主張を通す、あるいは通らぬからという理由で人を殺めるなど近代思想にそぐわない、忌しきものだ、と。今は何人にも言論の自由が均等に保証され、政治参加の機会もさまざまに与えられているとも。

ところがどうだろう、皮肉とはいえ、やはり社会の歪みやひずみが容易に是正されていないのも現実だ。侵略、抑圧、人種差別、性差別……。挙げつらったら限りがない。

これらはすべて権力悪から派生したものである。言論によってそれがよりよい方向に解決されるというなら、テロルなどいうもつとも「非人道」的に値する暴力に訴えたりはしないだろう。だが残念なことに、合法的暴力（戦争）というものが地球上に存在するかぎり、非合法たるテロリズムもまた、好むと好まざるとにかかわりなく存在するという点についても認めざるを得ない。現実を直視すれば、地球上にはいまだに戦火は絶えておらず、かえって残虐性の点でより深化し、おびただしい犠牲者で毎日が血塗られていよう。そこではまさに人命など羽毛よりも軽くあつかわれている。

テロルを賛美するつもりも容認するつもりもない。しかし単なるモラリズム、ヒューマニズムからそれを否定しようとするものにも与したくない。テロルの内に潜む、アイデンティティーと

いったものを理解しようとするなら、それらなど何ほどの用も足さないからだ。

むしろ、このテロリストの美しい魂には、聖職者のみが持ち得るある種の殉教精神にも似た、崇高な宗教性を私などは認めないわけにはいかない。「自己犠牲」「没我性」がそうさせるからだろうか。

ともあれ、そうしたテロリストの無垢なる「純粹性」の理解にいくぶんでもつとめようとするとき、私は歴史上の汚点を危惧することよりもむしろ、こうしたテロルを罪惡視し、忌避することで歴史上から抹殺しようとするその時代や思想の「勝者の論理」をこそ危険視したい。

「ライシャワー大使刺傷事件」を私に書かせた動機というのもじつはそこにあった。

十九歳の少年には政治的・思想的背景はまったくない、精神異常からきた単なる突発事件、とこの事件を当時のマスコミおよび司法当局は片付けた。むろん少年の訴えに耳をかたむける者など皆無だったのはいうまでもない。

そう片付けるにはしかし、片付ける側なりの論理があつてのことだろう。事件が事件だけに、ややもすれば外交的国際問題にまで発展するおそれがある。

安保問題に一応のケリがつき、国内の「反米感情」もひとところにくらべて下火になった。いよいよ米日密月時代に入ろうかという矢先である、それにヒビが入るような処理の仕方はどちらにとつても望むところではない。となれば少年を思想犯、政治犯とするわけにはいなくなる。もし、この事件をそうように扱ったとしたら、少年のいわんとすることを認める認めぬはともかく

も、聞く耳だけは持たなければならなくなる。当然のこととして、そのような「冒険」を敢えて国家がするはずがない。なぜなら、問題をこじらせることにしかならないからだ。

国内体制の方向を「政治の時代」から「経済の時代」へと着実に転換させるためには、日米協調路線の円滑化こそが急務である。そうした政治的打算が事件処理の論理にすり替わったのだ。

もっともこの種のテロ事件が発生した場合の処分方法として、犯人を「狂人」扱いするというのが常套手段ではある。事実この事件の場合もそうされた。彼らは自分達だけではまだ不十分とみたのか、知識人、精神病理学者、刑法学者とあらゆる権威を動員し、「乱心者」「白痴」「狂人」という慣用語を少年に付す手助けをさせた。

私はしかし、少年には政治的にも思想的にもれっきとした背景があったと認めるのである。

ライシャワー大使をターゲットにしたという点のみでこう断言するのではない。犯行におよんで少年のポケットには、社会の不条理を訴える一枚の陳情書がしのばせてあった、というこれだけをとつても立派な政治テロルに値すると思うからだ。

既成の政治組織や団体に加わっているか否かで政治的、思想的有無をもし判断するとしたら、それはとんでもない誤りだろう。まして少年のこの行為が、マスコミでいわれたように「精神異常者が自分の腹いせに刃物を振りかざした、通り魔事件」と扱われたとしたらどうだろう。じつはそこなのである、この事件を単なる一般刑事事件扱いにしたところに私が釈然としない理由は。少年がライシャワー大使にあてた陳情書には、自分の身体的苦痛（メニエール氏病）、おなじ苦痛に悩むものの救済、それにともなう施設の建設、ついでアメリカの占領政策の杜撰さ、不当性

等が書きつらねてあったという。

日本の国民の印象のなかに、わけてもケネディ大統領とライシャワー大使に対するそれにはすこぶる良いものがある。どちらも民主主義の体现者でリベラリストというハト派イメージが強くあつたからにちがいない。

しかし、ライシャワー大使にかぎつていえば、第二次大戦中はペンタゴンに入り、対日暗号解読の実務にたずさわり、戦後はマッカーサーによる対日政策を積極的にフォローしていた。「安保問題」で日本中に反米感情が高まると、その沈静化のために駐日大使という役回りを引き受け、さらにはベトナム戦争を機に「非核三原則」の空洞化につながる原子力潜水艦の寄港に道をひらく役割を演じるという、「大国のおごり」を随所にちらつかせていたのも事実であつた。

「大国のおごり」といえば、それを如実にしめたのが「ケネディ・ライシャワー路線」と称される、いわゆるアメリカ型民主主義の対日「輸出」政策であつたろう。安保問題で浮上した対米従属性を批判する国民の目を文化、思想、教育工作でかわそうとする意図のもとにそれは執行された。

すべての面で、日本中が根こそぎ「アメリカナイズ」されてゆくことに、とくに右翼でなからうと、多感な少年だったら反発を抱いたとしても不思議はないだろうし、それはむしろ健全な精神であつたろう。

行為そのものは少年とライシャワー大使との関係内で発生したものであつた。

しかし、である。少年をとり巻く、そうしたアメリカナイズされていった「時代」や「時代の気分」というものを抜きにしてこれを語ったとしたら、ある一面を見ただけにすぎず、この事件を俯瞰したことにはならないだろう。

つまり少年をしてその行為に駆り立てたもののひとつに、この「時代」や「時代の気分」というものが加担していたのではなかったか。そのかぎりであれば、かならずしも「単独犯行」として片付けてしまうわけにはいかないのではないか。

「時代」とはとりもなおさず安保問題、「政治の時代」から「経済の時代」へと移行する政治体制、池田内閣が基本政策のひとつに打ち出した「高度経済成長」論、「所得倍増」論を指す。

そして「時代の気分」をいうならば、六〇年安保問題を契機として高まりをみせた一般国民の政治意識、および全学連、その後みる全共闘の学生パワー、階級としての市民意識の芽生え、既成右翼陣営の親米・反共への総ナゲレ現象であろう。左右両陣営のテロルを含めた報復合戦が一段とエスカレートするのも、したがってこの「時代の気分」にデリケートに反応したがためであつたかも知れない。

学生や市民大衆による民衆運動が明とするならば、少年の犯行に似たものは暗とすることもでき、そうした時代潮流の大いなる渦のなかに十九歳のこの少年もまた巻きこまれ、翻弄されたというとらえ方さえできよう。

さらにもっといえば、この時代のそれが際立った特質だったのか、昭和三十年代という「時代の気分」には、ある意味で少年達をこうしたテロリストに追いやるなにかが潜んでいたようにも

思えてならない。山口二矢にしろ小森一孝にしろ、そしてこのライシャワー大使刺傷事件の実行者にしろ、申し合わせたようにみなティーン・エイジャーだった。

第一章 「ライシャワー米駐日大使刺傷さる」

1 「あれはだれだ！」

正午きっかりであった。ライシャワー米駐日大使は大使館本館を裏側の玄関から中庭へ出ようとしていた。

裏玄関から小さなポーチに出るとそこはロータリーになっていて、中庭とそのロータリーとを手入れの行届いた常緑樹の植え込みが隔てる。

数台の大使館関係の乗用車がロータリーには常時駐車されている。ひとところより日脚はのびたとはいえ外はまだ肌寒い。しかもその日はあいにくうす曇りであった。すでにそこにはライシャワー大使専用の黒塗りのキャデラックが随行員用のそれとともに、エンジンを始動して待機していた。

ライシャワー大使は、日韓両国にとって十数年来の懸案となっている「日韓問題」の推進者としてこの三月二十日以来来日中であつた韓国共和党議長金鐘泌と、芝高輪の光輪閣で昼食をとみにしながらの会談に臨もうというのであつた。